

論文

高校生のデートDVの予防教育 ーアクティブ・ラーニングを組み入れた予防教育から今後の活動を考えるー

中島 節子

Anti-domestic violence(DV) education to prevent the Date DV of high school students.
Planning the future activities from the preventive education incorporating active learning.

NAKAJIMA Setsuko

要 旨

2001年からDV防止に関する法律が施行されているにもかかわらず、相談件数などは増加している。若者たちのデートDVの実際について、高等学校での性教育受講生1109人のアンケート調査の結果から、3割以上がデートDVに関係している現状が明らかになった。しかし、その中で相談した生徒は2割であった。また、デートDVの認知度は約4割で、正しい知識を啓発していく必要があることがわかった。講義の中ではアクティブ・ラーニングを組み込み、実際に人とのかかわりについて、生徒自身が考え、他者の考えも聞く時間を作っている。デートDVは予防教育と早期発見が重要であり、受講生の反応や終了後の感想から、今後の効果的なデートDVの予防教育の在り方について検討した。

キーワード

予防教育 デートDV 高校生 アクティブ・ラーニング 健康相談

目 次

- I. はじめに
- II. 研究方法
- III. 講座の概要
- IV. 結果
- V. 考察
- VI. まとめ

文献

I. はじめに

ドメスティック・バイオレンス（Domestic Violence：以下DVと略す）の用語についての明確な定義はないが、日本では「配偶者や恋人など親密な関係にある、またはあった者から振られる暴力」という意味で使用されることが多い。また、恋人間のDVを「デートDV」とする。内閣府の調査では、デートDVの認知度は、言葉も内容も知っている者と言葉は知っている者を合計すると約6割である。また、10～20歳代に交際相手から暴力を受けたことがある被害経験者は、身体的暴力が6.0%、心理的暴力が8.2%、性的強制が3.8%、経済的圧迫が2.3%、あったとしている¹⁾。平成24年度の調査では、10～20歳代に交際相手がいた人の中でデートDVの被害にあった人は、女性13.7%、男性5.8%であった²⁾。デートDVについての予防教育が行われるようになってきてはいるが、交際相手からの暴力を受けていたり、デートDVが身の回りで起きていることを知る若者の割合は多い。配偶者からの暴力の防止及び被害者の保護等に関する法律が2001年に制定された。その後も法改正がされ、加害者の対象範囲も拡大した。それを受けて文部科学省では、若年層へのDVに対する教育啓発を各教育機関に通知し、「自分の大切さとともに他の人の大切さを認めること」を目標に掲げた³⁾。著者も若者たちの性の逸脱行動の防止やDV予防のために、生徒が「知りたい、教えてほしい」と思っている内容を中心に、人との関係性に重点を置いて講座を開講している。

教育機関が、生徒の性の問題行動を懸念している中、高等学校から、男女の関係やデートDVの予防についての講座の依頼が増えている。学校側も生徒達を守るために必要な策を講じている。デートDVは予防が一番であり、早期発見、早期対応が重要であると考えている。そのために、高校生が正しい知識を身につけ、対応できる能力を養うことを目的に講座を行っている。また、必要なときは、信頼

のおける大人や教員、養護教諭等に相談に行くことも強調している。DVの予防教育を行うことは、男女間のみでなく、暴力のない人間関係を築き、人権意識を高めることにもつながっていく。そこで、高校1年生にデートDVのアクティブ・ラーニングを取り入れた講座を実施した中で、高校生のデートDVの現状を調査し、受講生の反応や感想などから今後の講座のあり方を検討した。

II. 研究方法

本研究で「デートDV」⁴⁾とは、恋愛関係にある二者間（別れた恋人を含む）で振られる暴力とそれによる支配／被支配関係、虐待状態、主体性の侵害のこととする。

1. 対象

長野県の高등학교5校の性教育の講座（のべ8回）受講生1109人のうち、アンケートの有効回答者985人（男子537人、女子448人）とした。

2. 調査期間と調査方法

2014年から2016年の性教育の講話終了後のホームルームの時間に無記名にて自記式質問紙で実施した。質問紙の配布回収は、学級担任に依頼し回収した。

3. 調査内容

1) 属性

性別

2) 認知度

「DV」「デートDV」という言葉を受講前から知っていたか。

3) デートDVの現状

身体的暴力、心理的攻撃、経済的圧迫、性的強要の8項目について、「した」「された」「見たり聞いたりした」「何もない」の4択。

4) 相談の有無

3) で何もない以外の人の相談の有無、誰に相談したか

5) 感想などの自由記載

4. 分析方法

属性について無回答のものを除外し、各項目について単純集計を行った。すべての検定は有意水準を5%未満とした。データ集計、分析は統計解析ソフトIBM SPSS Statistics Version20を使用した。

5. 倫理的配慮

質問紙調査については、各学校長に了解を得て実施した。生徒に対しては、質問紙に強制ではないこと、個人は特定しないこと、データは研究以外に使用しないことを明記し、アンケート用紙の提出をもって協力を承諾したとみなした。

Ⅲ. 講座の概要

テーマ「生・性 大切なあなたを守るために」をメインテーマとし、高校からの要望と生徒の特質に合わせて内容や方法は変更している。講座時間も50分～90分と学校によって違いがあるため、講話内容なども一律ではないが、大筋は変わらない。また、大学生が参加できるときは、ロールプレイングを学生が実施し、グループワークにも参加するため、高校生も和やかに参加できていると考える。組み立てはおおよそ以下のとおりで、パワーポイントを使用している。

1. 講座の内容

1) 思春期の発達

男女の違い

2) デートDV

デートDVとは

デートDVを予防するために大切なこと

事例を通して、対応についてロールプレイングを通じて考える。

※大学生が参加できるときは、ロールプレイングを実施しグループワークに加わる。

3) まとめ

対等な関係を築くことの大切さとそのために必要なこと。

Ⅳ. 結果

質問紙提出者997人（回収率89.9%）、性別が無回答のものを除外し、有効回答数985枚（回答者中有効回答率98.8%）について分析した。

1. 性別

男性537人（54.5%）、女性448人（45.5%）であった。

2. DV、デートDVについての認知度

DVについては約8割の生徒が知っていた（表1）。デートDVについて知っていた人は38.2%と少なかった（表2）。性別にみると男性より女性の方がDVについても（ $p=0.049$ ）、デートDVについても（ $p=0.021$ ）認知度が高かった。

3. デートDVの実際

身体的暴力（叩く、物を投げる）、心理的攻撃（バカにする、大声で怒鳴る、メールチェック、友達制限）、性的強要（性的行為）、経済的圧迫（金銭的）の8項目について「した」、「された」、「見たり聞いたりした」、「何もなかった」の4択で回答した結果は図1、図2に示す通りである。身体的暴力をした経験のある人は28人、された経験のある人は41人、見たり聞いたりした経験のある人は116人、何

もない人は802人であった。心理的攻撃は、した経験のある人は52人、された経験のある人は85人、見たり聞いたりした経験のある人は181人、何もなかった人は707人であった。性的強要は、した人が3人、された人が24人、見たり聞いたりした人が52人、何もなかった人が904人であった。経済的圧迫はした人が5人、された人が4人、見たり聞いたりした人が32人、何もなかった人が933人であった。8項目すべてにおいて、全く何もなかった人は66.4%（表3）であった。デートDVの実際においての男女差はな

表1 DVの認知度

（単位：人（%））

	知っていた	知らなかった	無回答	合計
男性	414 (77.1)	120 (22.3)	3 (0.6)	537 (100)
女性	373 (83.3)	74 (16.5)	1 (0.2)	448 (100)
合計	787 (79.9)	194 (19.7)	4 (0.4)	985 (100)

Pearsonの χ^2 検定 $p = 0.049$

表2 デートDV認知度

（単位：人（%））

	知っていた	知らなかった	無回答	合計
男性	186 (34.6)	349 (65.0)	2 (0.4)	537 (100)
女性	190 (42.4)	258 (57.6)	0 (0)	448 (100)
合計	376 (38.2)	607 (61.6)	2 (0.4)	985 (100)

Pearsonの χ^2 検定 $p = 0.021$

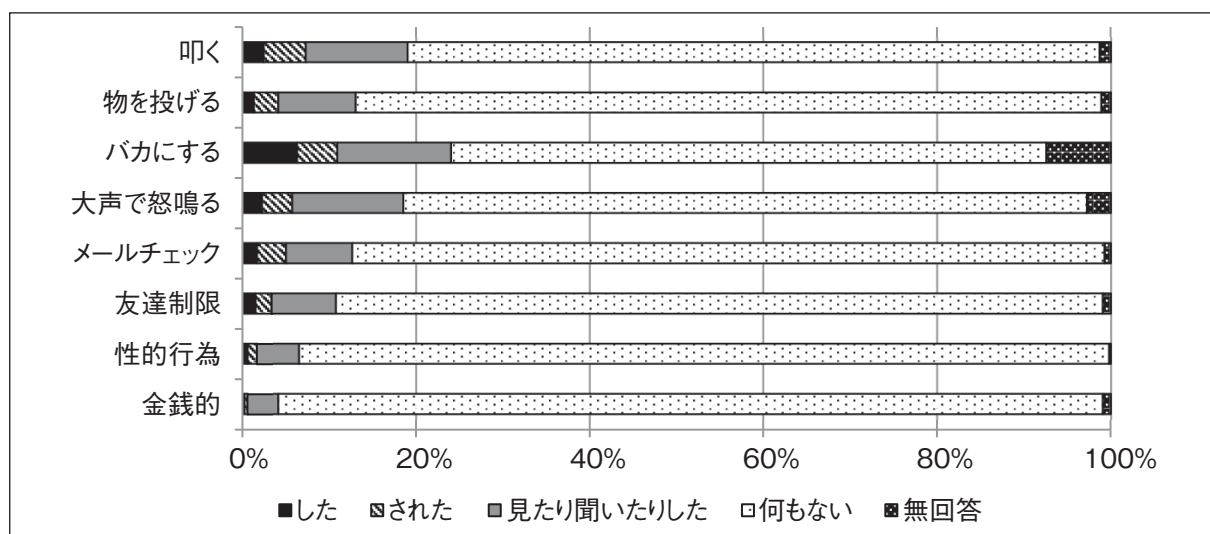


図1 デートDVの現状（男子）

かった。

4. 講座の感想（自由記載）

自由記載について、項目を絞り込みカテゴリー分けを行い、表4のようになった。「よかった。知識が大切」と、感想を記載した人は全体の約8割であっ

た。「DVをしないようにしたい」283人、「相手のことを考える、よい関係を築きたい」355人、「相談が大切、相談にのれるようにしたい」130人で、自分の行動に結びつけた感想が書かれていた。自由記載の中には、実際にデートDVをしたり、されたという記載もあり、抜粋して表5にいくつかの事例を掲載した。

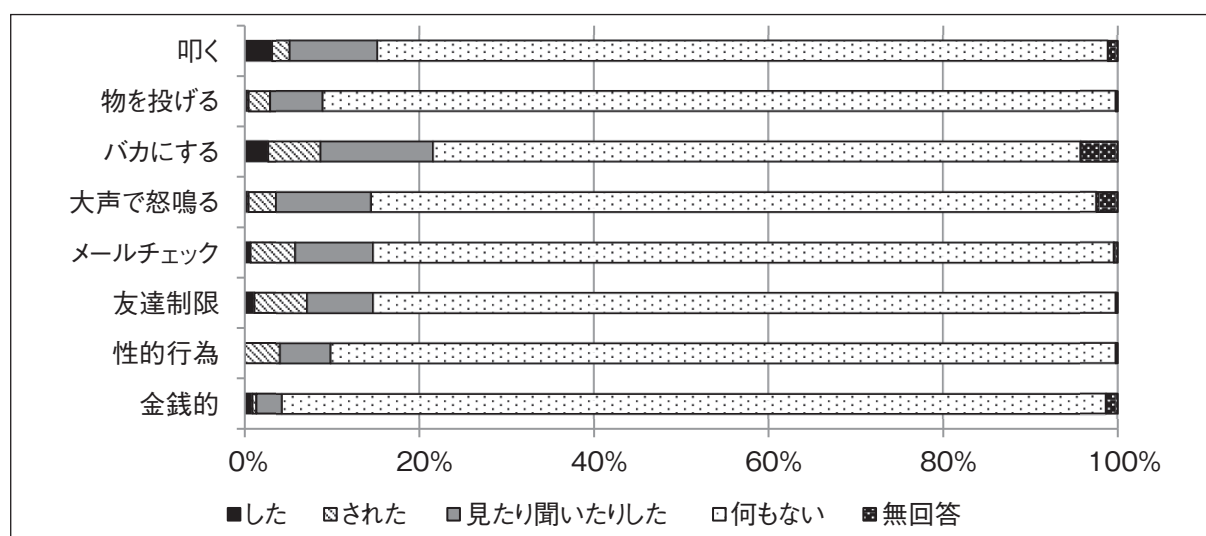


図2 デートDVの現状（女子）

表3 デートDVの現状（複数回答）

（単位：人（%））

	男性 535人	女性 448人	合計 983人
全く何もなし	361 (67.5)	292 (65.2)	653 (66.4)
した	42 (7.9)	22 (4.9)	64 (6.5)
された	50 (9.3)	56 (12.5)	106 (10.8)
見たり聞いたりした	131 (24.5)	108 (24.1)	239 (24.3)

（各性別内の%）男性535人、女性448人中

表4 自由記載の項目分類

項目	人数 (%)
よかった。知識が大切	781 (79.3)
DVをしないようにしたい	283 (28.7)
相手のことを考える、よい関係を築きたい	355 (36.0)
相談が大切、相談にのれるようにしたい	130 (13.2)
学生の実施について	67 (6.8)
その他	137 (13.9)
相手がいないので自分とは無関係	38 (3.9)

5. デートDVをした、された、見たり聞いたりした人の相談の有無

デートDVに関して何もなかった651人をのぞいた334人について、誰かに相談したかどうかを回答してもらった結果は、相談した人は66人(19.8%)であった。そのうち、デートDVをした人は14.1%、デートDVをされたことがある人は40.0%と、された人の方の相談者が多かった($p=0.0005$)。デートDVを見たり聞いたりしたことがある人の中で、他者

に相談した人は18.3%であった。デートDVの現実には当事者間に留められている傾向があることがうかがえる(表6、表7)。デートDVについて相談した人とDVやデートDVの認知との関係については、DVについて知っていたが相談はしていない人が多く、DVの認知は相談の有無と関係はなさそうであった。デートDVについては、相談しなかった人の割合が高く、「デートDV」とは知らなかったから相談しなかったとも考えられる結果であった($p=0.048$)。

表5 デートDVの実際(自由記載より)

- ・実は、ぼくはデートDVかなと思うことが多々あり、勉強になった。
- ・今日話してもらったことに似た悩みを持っていて辛いなと思うことがあります。どう対処するかしっかり考えたい。
- ・友達が今日の関係とそっくりです。2人はとても仲がいいように見えるときもあったり、幸せそうなきもあるので黙っていましたが、おかしいと言わなければと思いました。
- ・メールのチェックは、好きだからやっていたけど、デートDVになるのだとわかった。
- ・私は、Aちゃんと似たことを体験したことがあり、対等でない関係の怖さはとてもわかります。
- ・自分が彼女と付き合っていた時に独占欲が強くなってしまい、彼女の友人関係に口を出したり、怒鳴ったりしてしまった。申し訳ないことをしたと別かれた後になって思い、とても後悔した。もっと早く今日の話が聞けていたらと思いました。

表6 デートDVを経験した人が相談したか

相談の有無	人数 (%)
相談した	66 (19.8)
相談しなかった	266 (79.6)
無回答	2 (0.6)
合計	334 (100)

表7 デートDVをした、された、見たり聞いたりした別相談の有無

(単位:人 (%))

	相談した	相談しなかった	合計
したことがある	9 (14.1)	55 (85.9)	64 (100)
されたことがある	42 (40.0)	63 (60.0)	105 (100)
見たり聞いたりしたことがある	43 (18.3)	192 (77.4)	235 (100)
合計	94 (23.3)	310 (75.7)	404 (100)

V. 考察

交際相手間の殺傷事件やストーカー行為などの痛ましい事件が続発している。予防教育がそれらすべてを解決できるわけではないが、デートDVの知識を広め、暴力を根絶していくように社会全体が働きかけていかなければならない。本講座の目的は、デートDVについて正しく理解し、自分や相手を大切にすることとしている。すなわち、デートDVを予防する方法や万が一が起こった時に、早期に対処する術を知ることとした。また、男女間の問題のみでなく、人間関係にも対等の関係を築くことが重要であり、「嫌なことは嫌と言える」関係、コミュニケーションによって予防できることも伝えている。

デートDVの認知度はまだ低いが、少なくとも受講した生徒に周知することはできている。受講した約3割の生徒は、デートDVの被害者、加害者、見たこと聞いたことがあると回答しており、身近な問題となってきたことがうかがえる。そのうち相談した人は2割くらいに留まっていた。デートDVと認知していても75.8%の人は相談していなかった。これはデートDVは恋愛として普通のことと捉え重要視されていないのか、相談する術がわからないのか不明である。また、相談された側も正しい理解をもって対応することができれば被害の悪化を予防することができる。すなわち生徒達が、その行為が暴力なのかを判断できる知識と能力が必要になってくる。高校生ですでにデートDVが起きていることから、中学生からの予防教育も必要である。

今回は無記名のアンケートであったため、被害者・加害者の特定はせず、後に、生徒に相談するように担任等から指導を加えてもらった。講座後、生徒達が養護教諭に「デートDVを受けているかもしれない」「付き合っている人がいるけど…」などと相談に来ている。養護教諭も生徒達が、以前より性に関する相談にも来るようになったと感じている。また、他の調査でも、デートDV予防教育の後に相談されるようになった⁵⁾という視点での教育効果が評価されている。教員側も身近な問題として認識し、できるだけ関係者を巻き込み連携して生徒指導につなげていくことが重要である。

国内におけるデートDVの研究についての研究レビューの結果では、調査対象者が大学生・短期大学生等が約8割で、高校生のみの研究は約1割に留まっている⁶⁾。そこで、今回の高校生への調査は貴重といえる。DVの認知度は高いが、デートDVの認知度は、どの調査でもまだ半数以下である^{7)~11)}。しかし、防止教育プログラムに関する論文は中高生を対象としたものが大半¹²⁾であった。早い時期の予防教育を必要と考えているためであろう。また、青少年の性的関心や性行動の低年齢化に伴う日常化と、恋愛や性行動に関心のない青少年の双極化が進んでいる。第7回青少年の性行動の2011年の全国調査でも、高校生のデート経験率は2005年に男女とも6割近くあったのが、男子では6ポイント、女子は5ポイント低下している¹³⁾。そのような双極化の中で、集団への性教育の実施は慎重に行わなければならない。感想の中にも少数とはいえ、「相手

表 8 認知と相談の関係

(単位:人 (%))

	DVについて		デートDVについて	
	知っていた	知らなかった	知っていた	知らなかった
相談した	54 (16.3)	12 (3.6)	40 (12.4)	26 (8.1)
相談しなかった	221 (66.8)	44 (13.3)	125 (38.8)	141 (43.8)
合計	275 (83.1)	56 (16.9)	165 (51.2)	167 (51.9)

p=0.843

p=0.048

はいないので自分とは無関係」と答えている生徒が38名いたことも今後の検討課題としてあげられる。生徒が求めている性教育が行われないと「雑誌やネットの方が詳しい」¹⁴⁾などと、情報の入手先を誤ってしまい、誤った知識の習得や過剰な嫌悪感を与えることにもつながりかねない。

学校の特性や生徒達の行動に合わせた内容で、性行動を抑制的に捉えさせることなく、講座を行っていくための工夫と手法が必要であると考え。講座の中でアクティブ・ラーニングを取り入れていることで、性行動を自分のこととして考える機会となり効果的である。その場面を学生が担当すると、生徒達も和やかに打ち解けて参加でき、大学生の関わりを好意的に受け止めている感想も多く見られる。養護教諭特別別科（大学入学資格を有し、かつ看護師免許を有する人が1年間必要な単位を修得して養護教諭一種免許状を取得できる）の学生が行った性教育の効果として、肯定的に受け止められ、年齢が近くて話しやすい、楽しくてわかりやすく学ぶことができる¹⁵⁾とされている。これらについては、養護教諭希望の学生達が、性教育講座のサポートに入った時も同様の感想が出されていた。同世代の若者が関わるメリットも大きく、関わった学生の学びにもつなげることができるため、双方にとっての学習効果は大きい。

今後に向けて、生徒達が自分自身を大切にし、また他者も大切にし、人間関係を良好に築き、痛ましい事件等がなくなることを切望し、予防教育を効果的に行っていききたい。

VI. まとめ

デートDVはまだまだ一般的に認知されているとはいえ、知識の啓発や予防教育は積極的に行っていく必要がある。また、実際にデートDVに関係している生徒が3割いたが、相談した生徒は2割であった。予防教育に、アクティブ・ラーニングを取り入れることで、生徒自身が真剣に考える機会となっ

ている。講座後、教員等に相談したり、生徒が自己の行動を振り返る機会になっている点では一定の成果はあったと考える。

謝辞

本調査を実施するにあたって、ご協力くださった高等学校の先生はじめ生徒の皆様へ深く感謝申し上げます。なお、本研究は松本大学地域志向教育研究助成を受けて実施させていただきました。ここに記して感謝の意を表します。

文献

- 1) 内閣府男女共同参画局, 男女間における暴力に関する調査報告書, (2015年度3月調査).
http://www.gender.go.jp/policy/no_violence/e-vaw/chousa/h26_boryoku_cyousa.html (閲覧日2017. 4.28).
- 2) 内閣府男女共同参画局, 男女間における暴力に関する調査, (2011年度調査).
http://www.gender.go.jp/policy/no_violence/e-vaw/chousa/pdf/h23danjokan-7. (閲覧日2017.4.28).
- 3) 文部科学省, 人権教育の指導方法等の在り方について「第三次とりまとめ」第1章、2.学校における人権教育, (2008).
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/024/report/08041404.htm (閲覧日2017.5.1).
- 4) 伊田広行, 「ストップ! デートDV防止のための恋愛基礎レッスン」, 解放出版社, p.7 (2012).
- 5) 喜多加実代、阪井俊文, 「学校・大学におけるDV・デートDV予防教育の現状と課題—自治体の支援による推進の可能性—」『福岡教育大学紀要』第64号, 第6分冊, pp.1-8 (2015).
- 6) 赤澤淳子, 「国内におけるデートDV研究のレビューと今後の課題」『Journal of the Faculty of Human Cultures and Sciences of Fukuyama University』16, pp.128-146 (2016).
- 7) 「デートDV白書 Vol.5」NPO法人エンパワメントかながわ, (2017).
- 8) さいたま市, 若年層における交際相手からの暴力(デートDV)に関する意識・実態調査報告書 (2015).
<http://www.city.saitama.jp/006/010/006/001/p010638.html> (閲覧日2017.5.1).
- 9) 東京都生活文化局, 若年層における交際相手からの暴力に関する調査報告書 (2013).
<http://www.metro.tokyo.jp/INET/CHOUSA/2013/02/60n2d200.htm> (閲覧日2017.5.1).
- 10) 京都市男女共同企画参画推進協会, 「デートDVに関する実態調査」, (2012).
https://www.wings-kyoto.jp/docs/publish_H26DVishiki.pdf (閲覧日2016.2.26).
- 11) 山形県子育て推進部青少年・男女共同参画課, 「平成23年度デートDV実態調査について」
<https://www.pref.yamagata.jp/ou/kosodatesuishin/010003/danjo/danjosingikai/singikaidata/H24singikai/H24dvtyousa.pdf#search> (閲覧日2017.5.1).
- 12) 薄井江利香, 「デートDVの防止教育に関する教育の展望」『広島大学大学院心理臨床教育センター紀要』第10巻, pp.116~124 (2011).
- 13) 日本性教育協会, 「青少年における3つの性行動の推移」『「若者の性」白書 第7回青少年の性行動全国調査報告』小学館, p.14-15 (2013).
- 14) 森本美佐, 「母子保健対策としての性教育—思

春期からの性教育の評価と課題—」『奈良文化女子大学紀要』46, pp.113-119 (2015).

- 15) 河田史宝, 「養護教諭特別科の学生が行った性教育授業に対する生徒の受け止め方: 高校1年生対象に」『金沢大学人間社会学域学校教育学類教育実践研究』第41号, pp.43-54, (2015).